

『注好選』に於ける「曰」と「云」について

王暄

一、はじめに

「曰」と「云」は元々は同源字⁽¹⁾であるとされ、音声的にも意味的にも非常に近い語とされている。中国の古典語文だけではなく、日本の漢文にも、「曰」と「云」の両方が用いられる。また、訓読の場合は、「曰」と「云」はいずれにも「イフ」、「イハク」、「イフシク」、「マウス」、「コヽニ」などの訓を取る⁽²⁾。

このように、「曰」と「云」は同じ「いう」、「いわく」などの意味を持っているが、違う漢字である以上、使い分けがあることを予想することができる。

現在、筆者は日本漢文資料における用字法の問題について研究し、その本質を説明しようとしている。資料による用字法の差をはつきりさせることにより、日本漢文諸資料の分類と資料の質的差異の解明に至ることが予想される。

本稿ではまず、平安末期頃の説話集とされる『注好選』⁽³⁾を中心に「曰」と「云」の使用状況を考察する。用例の分析から、「曰」と「云」にはどのような用字法が見られるか、

その用字法の帰納と解明が本稿の目的である。

まず、中国古典語文の用例を見ながら古辞書類と古注における「曰」と「云」の解釈を把握しておきたい。「曰」と「云」についての説明は以下のものが見られる。

〔説文〕曰、詞也。从口乙聲、亦象口气出也。凡曰之屬皆从曰。王代切。〔段注〕詞者、意内而言外也。有此意而有此言、亦謂之曰、亦謂云云。云曰雙聲也。

段玉裁『説文解字注』では、「曰」と「云」はいずれも、心の中に思っていることを言葉を通じて口に出すと注している。現代日本語で言えば、「いう」に当たる。また、

〔増韻〕曰、謂也、稱也。

とあるように、「曰」は「なづける」、「となえる」の意があると思われる。

また、「曰」と「云」は使用上、共通性があることが以下のものから分かる。

〔説文〕云、山川氣也、象回轉形。後人加雨作雲、而以云爲云曰之云。

〔正字通〕云、與曰音別義同。凡經史、曰通作云。

〔論語・子路〕始有、曰苟合矣。〔皇疏〕曰、云也。

『説文』には「云曰之云」とあり、「云」を「曰」とペアにして挙げることから、他の言説動詞よりも、意味的に近いことが見てとれる。また、『正字通』にある「凡經史、曰通作云。」により、凡その經書と史書に於いては、「曰」と「云」は近いと考えられていることが分かる。皇侃『論語義疏』にも、「曰」は「云」であると解釈している。

日本の資料に関しては、例えば以下のものが挙げられる。

〔觀智院本類聚名義抄〕

曰 上越 イフ イハク トク マウス コ、ニ コタフ イフ
シク 禾音 ワチ

云 上雲 イフ イハク イフシク コ、ニ マウス スクナ

シ

觀智院本『類聚名義抄』により、言説動詞の場合は、「曰」

と「云」はいずれも「イフ」、「イハク」、「マウス」、「イフシク」と訓ぜられる。他には、「曰」には「トク」「コタフ」という訓もある。

現代の研究に関しては、「曰」は「人の言葉を写し書くときに用いる」とされ、また、「云」は「言葉を引用するとき」に用いる」という用字法上の差が指摘されている（水沢利忠一九九一）。しかし、「曰」と「云」の使用は資料によってこ

の説とは異なる用字法が現れている。例えば、大正新脩大蔵經に収載された漢訳仏典を調査したところ、「曰」と「云」の両字共に人の言葉を写し書くときに頻用されていることが分かる。また、日本漢文資料における「曰」と「云」も、異なる資料によって用字法の差を想定される。以上の問題点を踏まえ、また、古辞書と古注における「曰」と「云」の解を視野に入れながら、以下に『注好選』における「曰・云」の使用状況の具体的な検討を行うこととする。

研究方法としては、『注好選』における「曰」と「云」のすべての用例を取り上げ、意味と用法の違いにより分類し比較する。

二、『注好選』における「曰」と「云」

『注好選』における「曰」と「云」の使用例はいずれも（一）指称する（二）人の言う言葉・引用の語句の内容を表す（三）言語行為の動作を表す場合に現れる。それ以外に、「云」には「云云」と「云何」の固定用法もある。用例数に関しては、「曰」は述べ84例、「云」は述べ343例⁽⁴⁾があり、「云云」は13例、「云何」は1例が見られる。用例数からみると、「云」は「曰」の用例数の四倍以上に上登っていることが分かる。

まず(一) 指称する場面で使う「曰」と「云」について分析していく。

(一) 指称する場面で使う「曰」と「云」

『注好選』においては、「曰」と「云」のいずれを使っても人の呼称や物事の呼び方を示すことができる。つまり指称する場面で使う「曰」と「云」である。こういった使用場面における用例数は「曰」30例、「云」42例となる。全体的にみると、「曰」と「云」の両方とも指称を表せるが、すべての用例を更に細かく分けると、例文の構造には異同が現れる。まず、「曰」の使用状況から検討していく。

(1) 指称する場面で使う「曰」

指称する場面で使う「曰」の用例は、文の構成から以下の三つの形に分けられる。

① 対象＋「曰」＋指称する言葉(23例)

② (対象＋)「名」＋「曰」＋指称する言葉(6例)

③ 指称する言葉＋「曰」＋対象(1例)

ここにおいては、「対象」は指称の対象を指しており、指称の対象となるものは人や鬼神、また、物、場所などがある。

「指称する言葉」には、人や鬼神などの呼称、物の呼び方、場所の名称などがみられる。

① 対象＋「曰」＋指称する言葉

この形の例は現代語に言い換えると、「○○を○○という」、「○○は○○という」と訳せる。例を挙げると、

【例1】鄭玄曰兩河間曰冀洲河南曰豫洲。河西曰灘洲漢南曰荊洲河南曰楊洲潁河南曰充洲。濟東曰徐州。邳曰幽州晉曰營洲。〔中3ウ・地稱為清濁第二〕

【例2】首文曰礼翼文曰仁背文曰義腹文曰信左右文曰智。〔下30オ・鳳凰有仁智第四十二〕

【例3】父曰頻婆羅王母名韋提希。〔中33ウ・阿闍世王詣靈山第三十五〕

例1の「曰」はすべて地名を表すものである。例2は、「首の文を礼といい、翼の文を仁といい、背の文を義といい、腹の文を信といい、左右の文は智という。」と訳せる。鳳凰の身には五つの文があり、それぞれは「礼・仁・義・信・智」という。ここにある「曰」は五つの文の呼び方を示している。例3の「曰」は人の呼称を表している。

② (対象＋)「名」＋「曰」＋指称する言葉

「曰」は呼び名を表す場合、直接「名」＋「曰」の形が用いられる。この場合は、「名は○○という」、または「名付けて○○という」というような現代語に訳せる。指称の対象は同じ文に示すものと、示さないものがある。指称の対象を「曰」のある文に示さない場合は、「曰」の前の文に提示されている。例を挙げると、

【例 4】 天名曰大極第一〔中1オ・天名曰大極第一（タイトル）〕

【例 5】 即石面有碑文云是名曰信娘草。〔中15ウ・賢者種稻穀第十三〕

【例 6】 彼須達所売与之地立多本樹。名曰遊多林。〔中17表・祇陀大臣施樹第十五〕

【例 7】 成白鼠善知一年之内吉凶并千里之外事。名曰神。〔下6オ・五百老鼠得羅漢果第六〕

【例 8】 昔舍衛国有一長者。名曰利陀南。〔下20オ・石中蛇現仏身説法第廿五〕

【例 9】 此比丘名曰精進力。〔下22オ・五通比丘聞禽獸辛苦第廿七〕

例4の「曰」は「天名曰大極第一」というタイトルにある例であり、「天の名を大極という」という意味である。例5の「是名曰信娘草」は、「これを名づけて信娘草という」、或いは、「是の名は信娘草という」と訳することができる。例6

の「名曰遊多林」は（その地を）名づけて遊多林という、或いは、「名を遊多林という」と訳せる。指称の対象の「地」は「曰」の前の文に確認できる。例7の「曰」は（白鼠を）名づけて神というと言っている。ここにおいては、「白鼠」は指称の対象であり、「曰」の前の文脈から確認される。例8は、「昔、舍衛国には一人の長者がいた。名を利陀南といった」と訳せる。例9は、「この比丘の名は精進力という」と言っている。

③ 指称する言葉＋「曰」＋対象

「曰」のこの形の例は一例が見られる。「○○という○○」と訳せる。この「曰」は「曰」の前後の言葉は同格であることを示す。用例を以下に挙げる。

【例 10】 後漢□□^⑤此学生本元卿曰家子也。〔上9ウ・桓榮勗己第二十八〕

文脈からは、主語の此の学生は、元々は元卿という家の子である、と読むことができる。この「元卿曰家子」の「曰」は連語とし、「元卿」と「家」を結び、一つの語にする働きをしている。

(2) 指称する場面で使う「云」

指称する場面で使う「云」は文の構成から以下の六つの形に分けられる。

- ① 対象＋「云」＋指称する言葉（30例）
- ② 「云」＋指称する言葉（5例）
- ③ 指称する言葉＋「云」＋対象（3例）
- ④ 指称する言葉＋「云」（1例）
- ⑤ 「名」＋指称する言葉＋「云」（2例）
- ⑥ 対象＋「何」＋「云」（1例）

① 対象＋「云」＋指称する言葉

この形の「云」は、文の組み立て上「曰」の①対象＋「曰」＋指称する言葉という形と同じだと考えられる。つまり、「○を○○という」と訳せる。例を以下に挙げる。

【例11】此間又有甘増減。是云中劫。（中略）更芥子許無遺留物。是云劫燒。「上1ウ・劫燒第一」

【例12】春云蒼天夏云炎天秋云昊天冬云玄天。「中1ウ・天名曰大極第一」

例11の「是云中劫」は「これを中劫という」、また、「是云劫燒」は「これを劫燒という」と訳せる。例12は、「春は蒼天といい、夏は炎天といい、秋は昊天といい、冬は玄天とい

う。」と言っている。

② 「云」＋指称する言葉

この「云」は「(○○を)○○という」という意味で使う場面である。「云」の位置は指称する言葉の前に来ることが「云」の①の形と同じである。違うところはと言えば、②は指称する対象、つまり「曰」の目的語を文の中に省略している。指称の対象は前の文脈に確認することができる。

【例13】時有大臣。云文選博士。「上32ウ・文選止諍第八十六」
例13には、「云」のある文は「文選博士という」と訳せる。

「文選博士」を指す対象の「大臣」は、その上の文「時有大臣」から分かる。

③ 指称する言葉＋「云」＋対象

この用法は、「曰」の③指称する言葉＋「曰」＋対象と同じだと考えられる。例は以下の3例が見られる。

【例14】荊保云人為飢饉家貧故与父共行隣州而盜人財。「上33ウ・殺父頸孝子八十九」

【例15】楚那云人家菌内造小舍居孀母養育。「上34オ・亘母橋不孝第九十」

【例16】則有阿修羅王云者。「下14オ・金翅鳥訴子難第十四」

例14の傍線部の「云」は、「荊保という人」とあり、例15の「云」の部分は、「楚那という人」とあり、例16の「阿修羅王云者」は「阿修羅王という者」となる。

④ 指称する言葉＋「云」

この「云」は「(○○)は(○○)という」という意味である。ここにおいては、「云」は指称する言葉の後ろに来る。

指称の対象は「云」と同じ文に示されるのではなく、前の文脈に言及される。例は以下で示す。

【例17】往有三人。同父一腹兄弟也。田祖田達田音云。〔上37ウ・田祖返直第九十七〕

【例18】故文云大樹毗嵐風池象山力士竜鳥牛師子夜叉毗沙門云。〔中18ウ・舍利弗勝外道第十六〕

例17は、「(この三人の兄弟は)田祖、田達、田音という」と言っている。指称の対象である三人の兄弟は「云」前の文に確認できる。例18は、「故に文には、「大樹毗嵐風池象山力士竜鳥牛師子夜叉毗沙門」と言っている」とある。

⑤ 「名」＋指称する言葉＋「云」

対象の「名前」を表す場合、「名」＋指称する言葉＋「云」の形もある。「名は○○という」。

【例19】名提婆達多天熱云。〔中5オ・調達苦大王第三〕

例19は、「名は提婆達多天熱という」と言っている。この「云」は指称する言葉の後ろに来る。この例は「調達苦大王第三」の最初の文であり、指称の対象はその前のタイトルの「調達苦大王第三」に確認できる。「曰」の②とは構文が異なる。

⑥ 対象＋「何」＋「云」

「何云」は疑問を表す形の連文であり、「云」は疑問詞の「何」の後ろに付く。「○○は何という？」といった疑問の意味の使い方である。

【例20】逢古老女問云此処何云也。〔上41オ・嶋子別答雲第一百二〕

例20においては、古老の女は「此処は何というのか」と問いかけている。

以上は『注好選』における指称する場合で使う「曰」と「云」であり、文の構成から分類、帰納したものとなる。指称する場合は、「曰」と「云」のいずれも連語として前後の名詞を結ぶことができる(「曰」③、「云」③)。また、「曰」と「云」は両方とも指称する言葉の前に付く例が現れる(「曰」①②、

「云」①②)。この場合は、「曰」の例は基本的には指称の対象を「曰」の前にはつきり示しているが、「名曰」の場合は指称の対象を省略することができる(「曰」②)。「云」の例には指称の対象をはつきり示すか、省略するか両方ができる(「云」①②)。また、「云」は指称する言葉の後ろに付く用例もある(「云」④⑤)。こういった形の例は「曰」には見えなかった。その他には、疑問詞の「何」と一緒に使う例は「何云」の一例が現れたが(「云」⑥)、「曰」には見えなかった。

(二) 人の言う言葉・引用の語句の内容を表す

人の話す言葉の内容や引用の語の内容を表す場合の「曰」と「云」となる。この場面で使う「曰」は述べ50例があり、「云」は281例が現れる。「云」の用例数が五倍以上である。言葉の内容を表す「曰」と「云」を更に以下の三つの使用場面に分けられる。

- (1) 発話場面では、直接話者の発話の内容を示す
- (2) 文章の語と内容を引用する
- (3) 発話場面以外の人の言うことの内容を示す

(1) に該当する用例数は、「曰」34例、「云」211例となる。(2)の場合は、「曰」は16例、「云」は66例となる。(3)の場合は、「云」は5例、「曰」の例は現れなかった。

(1) 発話場面では、話者の発話の内容を示す「曰」と「云」

話者の発話の内容、または会話のやり取りの内容を表す場合は、「曰」と「云」の両方が用いられる。例えば以下のものが挙げられる。

【例21】後漢□□此学生本元卿曰家子也。即与元卿俱在田。

暫休息暇桓采読書。元卿曰貧賤基在之。〔上9ウ・桓采勸己第二十八〕

【例22】時母怪而報父。々(父)曰若吾子舜哉。汝将吾可向市。〔上14オ・舜父盲明第四十六〕

【例23】原谷走返載祖父輦費来。父呵責云何故持来耶。原谷答云為人子者老父棄山者也。我父老時入之将去棄。〔上18オ・原谷輦第五十七〕

例21と例22は「曰」を使う用例であり、例23は「云」を使う例である。

例21の「元卿曰貧賤基在之」は、主人公の桓采は元卿という族人と共に田におり、桓采は休憩して読書をするとき、元

卿が桓榮をあざ笑って言ったことである。元卿は、本を読んでも何の役にも立たないと思ひ、「貧窮のもとにはこれにあるのだ」と言っている。ここでは「曰」が用いられている。

例22は、舜の父がその後妻に問いかけて言った言葉である。舜の父は、「もしかしてわが子の舜ではないか。」と言っている。ここにおいては、「曰」を用いて舜の父の言うことを示している。

例23では、原谷の父は不孝であり、輦を作つて、原谷の祖父をこれに入れて原谷と共に担つて山に棄てた。原谷は祖父を乗せた輦を拾つて帰つた。原谷の父は非難して、「なぜ(輦)持つて帰るのか」と聞くと、原谷は「人の子は老いた父を山に棄てるものだ。わが父が老いた時も、これに入れて棄てるつもりだ。」と答えたのである。「云」を使って原谷とその父の会話の内容を示している。

(1) 1、発話の内容を表す「曰」

話者の発話の内容を表す場面で使う「曰」の用例は、文の組み立て上、大きく分けると以下の三つの形の文が現れた。

- ① (話者+)「曰」+発話の内容(16例)
- ② (話者+) +動詞(+目的語) +「曰」+発話の内容(17

例)

③ 話者+介詞⁽⁶⁾+名詞+「曰」+発話の内容(1例)

① (話者+)「曰」+発話の内容

右の形を取る場合は、主語の話者が省略されることもある。次の例を挙げられる。

【例24】即兄曰吾殺也。〔上22ウ・義士遇赦第六十五〕

【例25】弟曰兄不殺。〔上22ウ・義士遇赦第六十五〕

【例26】王曰罪法有限。不得代罪。〔上22オ・義士遇赦第六十五〕

【例27】即曰寝上夫東首妾西首也。後來可斬東首。〔上25ウ・郎女代枕第六十七〕

例24から例26は同じ義士遇赦第六十五にある会話文であり、出典との関係で注意を引かれる。「曰」はそれぞれ話者の兄、弟、王の言ったことを示している。例27の「曰」は郎女の言ったことを示し、ここでは、主語である話者の郎女は省略されている。

② (話者+) 動詞(+目的語) +「曰」+発話の内容

この形の場合、動詞に当たる部分を細かく見ると、言語行為動詞、感情心理動詞と動作動詞の三つに分けられる。すべての動詞を纏めて以下のものとなる。

〔言語行為動詞〕

答曰（1例）、問曰（2例）、語曰（2例、その中、「語曰」は1例、「語＋相手＋曰」は1例）、

〔感情心理動詞〕

嘆曰（2例）、呪曰（4例）、泣曰（1例）、悲曰（1例）、奇曰（1例）

〔動作動詞〕

拝曰（1例）、見曰（2例、その中、「見曰」は1例、「見＋目的語＋曰」は1例）

具体例を以下に挙げる。

【例28】母問云何高泣耶。答曰杖不痛。故泣也。〔上17ウ・伯楡泣杖第五十六〕

【例29】即皇取鼠一枚入箱召鷓鴣問曰此箱入物体与員卜申也。〔上29ウ・鷓鴣悔卜第七十八〕

【例30】仍頭語尾曰汝放我。〔下28オ・有一蛇頭与尾論第卅七〕

【例31】史答云可愛童子淚至河中仰天嘆曰我不計之外忽遭蜂難離家浮蕩無歸所。〔上24ウ・佰奇弘蜂第六十六〕

【例32】女人呪曰若女和上生返吾不惜而与。〔中24ウ・毗豆盧和上化堅食女第廿五〕

【例33】時閔騫泣曰母在一子又在二子。〔上14ウ・閔騫母去還留第四十七〕

【例34】仇大傷嗟而悲曰貞母〔女ハイ本〕代夫捨命。〔上26オ・郎女代枕第六十七〕

【例35】王奇曰惟非凡鉄。〔上32オ・莫耶分劔第九十二〕

【例36】五王子前来再拝曰暫公達各々坐給。〔上32ウ・文選止靜第八十六〕

【例37】後母出見曰噫惡怪鳥也。何不射殺。〔上25オ・佰奇弘蜂第六十六〕

例28から例31は、言語行為動詞の「答」、「問」、「語」が「曰」に前接する例であり、例32から例35は、感情心理動詞の「呪」、「泣」、「悲」、「奇」が「曰」に前接する例であり、例36と例37は動作動詞の「拝」、「見」が「曰」に前接する用例である。

③ 話者＋介詞＋名詞＋「曰」＋発語の内容

こういう形の「曰」の用例は、以下の一が見られる。

【例38】母向台曰吾年已老。〔上15ウ・孟宗泣竹第五十〕

この一例は、話者＋介詞の「向」＋介詞の目的語「台」＋曰＋言葉の内容、という形である。「曰」を使って、話者の母が台に向かって言った言葉を引き出す。

(1) ・ 2、発話の内容を表す「云」

発話の内容を表す「云」は以下の形の例が現れる。

- ① (話者＋)「云」＋発話の内容 (55例)
- ② (話者＋)動詞(＋目的語)＋「云」＋発話の内容 (135例)
- ③ 話者＋動詞＋接続詞＋「云」＋発話の内容 (2例)
- ④ 話者＋副詞＋動詞(＋目的語)＋「云」＋発話の内容 (15例)
- ⑤ 話者＋介詞＋名詞＋「云」＋発話の内容 (2例)
- ⑥ 発話の内容＋「云」(2例)

① (話者＋)「云」＋発話の内容

この形の「云」の用例は以下のものが挙げられる。

- 【例 39】乃賊云何故汝桑実各別二種乎。〔上 20 才・蔡順脱賊第五十九〕

【例 40】家人云有一画扇。〔上 22 才・張敷泣扇第六十三〕

【例 41】有人云何不娶女。〔上 26 才・義夫護墓第六十八〕

【例 42】時妾語其父云我愛此子。〔上 23 才・義士遇赦第六十五〕

例 39 は、賊は蔡順の桑の実を奪おうとし、桑の実が赤と黒と分けられたのを見て、「なぜ桑の実をそれぞれ二種類に分けたのか」と聞いた。例 40 においては、張敷は母が亡くなった前に自分に何か財産を残したかと親戚に聞くと、「画扇

が一つある」と返事されたのである。例 41 は、ある人が楊里に問いかけて、「なぜ他の女の人を娶らないのか」と言っている。例 42 は、その時妾がその父に、「私はこの子を愛しています」と言っている。

② (話者＋)動詞(＋目的語)＋「云」＋発話の内容

この形の「云」の用例は、動詞の使用状況を見ると、更に言語行為動詞、感情心理動詞、動作動詞、使役動詞の四つに分けられる。纏めたものは以下となる。

〔言語行為動詞〕

謂：云 (2例)、説云 (2例)、告云 (7例、その中、「告：云」3例、「告云」4例)、語云 (19例、その中、「語：云」16例、「語云」3例)、問云 (18例、その中、「問：云」3例、「問云」15例)、答云 (30例)、申云 (3例)、談：云 (1例)

〔感情心理動詞〕

奇云 (1例)、疑云 (1例)、詠云 (2例)、詰云 (1例)、泣云 (1例)、驚覚云 (1例)、驚奇云 (1例)、吟云 (1例)、讚云 (1例)、歎云 (1例)、悲云 (1例)、悲痛云 (1例)、呵責云 (3例、その中「呵責：云」1例、「呵責云」2例)、頌云 (4例)

〔動作動詞〕

還家云(1例)、叫云(1例)、教云(1例)、屈膝云(1例)、訓云(1例)、契云(1例)、結契云(1例)、見云(2例)、その中、「見云」1例、「見…云」1例、授記云(1例)、召…云(2例)、誓云(2例)、説偈云(3例)、漸歩云(1例)、奏云(3例)、勅云(1例)、歌云(1例)、倒地云(1例)、発願云(1例)、請…云(1例)、卜云(1例)、鳴云(3例)、来云(1例)、誨云(1例)、授…云(1例)
 〔使役動詞〕
 命…云(2例)

具体的な用例は以下のものを挙げられる。

【例43】蔡順答云色黒味甘。〔上20才・蔡順脱賊第五十九〕

【例44】友問云何故不着衾。答云我母独寒家宿也。〔上21ウ・白年返衾第六十二〕

【例45】原谷答云為人子者老父棄山者也。〔上18才・原谷賣糶第五十七〕

【例46】時賊歎云我雖賊有父母。〔上20才・蔡順脱賊第五十九〕

【例47】楊威跪虎前泣云我有老母。〔上20ウ・楊威脱虎第六十〕

【例48】時張敷悲痛云我母存生之時為我有遺財乎。〔上22才・張敷泣扇第六十三〕

【例49】即仏命目連云汝往身子所可将来。〔中23才・舍利弗誡目連第廿三〕

例43から例45は、言語行為動詞に後接する「云」の用例であり、例46から例48は感情心理動詞に後接する「云」の用例である。また、例49は使役を表す動詞「命」に後接する「云」である。

③ 話者＋動詞＋接続詞＋「云」＋発語の内容

【例50】王臣共悦而云此馬何故常向北風嘶耶。〔下24才・胡馬嘶北風第卅〕

この例は感情動詞の「悦」＋接続詞の「而」＋「云」の用例となる。

④ 話者＋副詞＋動詞（＋目的語）＋「云」＋発語の内容

【例51】相語云売吾家移住他国。〔上37ウ・田祖返直第九十七〕

【例52】相議云先一捕此木下枝次連々至水底取出月。〔下18才・獼猴取水底月第二十七〕

例51の「相語云」は副詞の「相」＋動詞「語」＋「云」の用例である。また、例52は、副詞「相」＋動詞「議」＋「云」の用例である。

⑤ 話者＋介詞＋名詞＋「云」＋発語の内容

【例53】成人向兄等云為吾父有何領。〔上32才・文選止諍第八十〕

六)

この例は、介詞「向」＋名詞「兄等」＋「云」の用例である。

⑥ 発話の内容＋「云」

この「云」は、発話内容の後にくる「云」である。発話の内容を受けて、「○○と言った」と訳せる。『注好選』には、以下の2例が現れた。

【例54】時目連疲極僧居座受施居鉢縁而息。僧等見之云此似沙門虫也。何衣虫落来耶云共慢。〔中24オ・目連難窮仏声第廿四〕

この例においては「云」は二つある。一つ目は「僧等見之云」である。この「云」は「云」の動作を表すことと発話内容を受けることという二つの働きを考えると考えられる。次にくる傍線部の「云」は同じ発話内容を受ける「云」であり、合わせて、僧等は彼を見て言つて（云）、（発話内容）といった（云）、と意味している。

【例55】即為一家夫婦相語云相互永不交会。終今生直入仏知見云了。〔中31ウ・金色女離婬行第三十二〕

この例は前例と同じように、同じ発話内容の前後には「云」が二つ付いている。後ろにある傍線の「云」は「…」と言ひ終

えた」と使用された例であると考えられる。

以上は発話場面で使う「曰」と「云」である。「曰」と「云」の用例からみると、文の構成上、「曰」の一つの言葉で発話の内容を示すことができる。また、他の動詞（動詞連語）に付くことや、介詞連語の後ろに付くこともできる。それに対して、『注好選』の中の「云」は文の構造上より多様な形が現れている。発話場面で使う「云」は、単独で使い、動詞（動詞連語）、介詞連語の後ろに付くこと以外には、接続詞、副詞連語の後ろに付く例もある。また、同じ発話内容の前後には二つの「云」を使うこともできる。

(2) 文章の語句と内容を引用する場面

文章の語句を引用する場合、「曰」と「云」の両方が用いられる。この場面で使う用例数は、「曰」は16例があり、「云」は65例がある。この場面で使う例はすべて、「引用元＋曰・云＋引用する内容」という形になっている。引用元の文献は、『抱朴子』、『白虎通』、『文選』、『史記』、『広雅』、『仲尼遊方問録』、『論衡』、『大清経』、『山海経』など、幅広く引用されている。例を挙げると以下のものがある。

【例 56】抱朴子曰大極初構者。〔中 1 才・天名曰大極第一〕

【例 57】白虎通曰河図格云天不足西北。〔中 1 ウ・天名曰大極第二〕

【例 58】黄帝書曰天在地外。水在天外。〔中 1 ウ・天名曰大極第二〕

【例 59】賢愚經云昔仏在世時須達家信敬仏法為僧且越所須一切供給。〔下 6 ウ・二羽鸚鵡成辟支仏第七〕

【例 60】俱舍云月広五十由旬。〔下 2 才・月称玉兔第二〕

【例 61】仲尼遊方問録云地有五岳四瀆。可見本書。〔中 4 才・地称为清濁第二〕

(3) 発話場面以外の言う内容を示す

発話場面以外の人の言うことを示す場合、「云」のみが現れている。以下のものが挙げられる。

【例 62】其師常不食。謂腹中在病。医家云一生之間可食脩。即時孝尼請天祈地為師常獨山野則每一字貢千脩。〔上 13 才・孝尼貢脩第四十四〕

この例では、主人公の師はふだんは食事をしない。これは腹中に病があるためである。医師は「一生の間脩(7)を食べるべし」と言ったため、孝尼天に請願して、地に祈って、師の

ために山野で狩りをして、一字を学ぶことに大量のししびしおを師に差し上げた。文脈からみると、傍線部の「医家云」は、発話場面の時点で話すのではなく、「医者は…を言ったため、主人公は…をする」と、「云」は過去の言ったことを示していると考えられる。

【例 63】則思惟若取吾冠者可云取李。〔上 30 才・陳安掛冠第七十九〕

この例においては、陳安という人が他人の家の垣を通りかかったとき、李の枝に冠を引っ掛けた。すると、彼は「もし私が冠を取れば、きっと李を取ろうと言われるのだ」と考え、冠を枝から取らずにそのまま捨てたという文脈である。傍線部の「可云取李」は、「李を取ろうと言われるだろう」という意味になり、「云」は発話場面の言葉の引用ではなく、陳安が想起した他人の言うべきことを示している。

【例 64】頭尾自諍。頭語尾言我当為大。尾語頭云我当為大。頭云我有耳能聽。有目能見。有口能食。行時在前。故我可為大。汝無此術。云何為大。〔下 28 才・有一蛇頭与尾論第卅七〕

この例では、頭と尾はそれぞれ自分のほうこそ優れていると争っている。頭は「私は耳があり聴くことができ、口があり食えることができ、進むときも前のほうにいる。なので、

私のほうが優れているのだ。全部あなたにはできないことなのに、どうして自分が優れるというのだ」と尾を非難している。「云何為大」は「なぜ自分が優れているというのだ」と解せる。傍線部の「云」は他人の言ったことを示している。

【例 65】以此子喩法師在家即非出□非在家義。欲云在家其体法師也。欲云出家其行在家□。〔下 31ウ・鳥交通雉使生子四十四〕

この例は、「鳥交通雉使生子」の話をもって、僧や俗聖の「在家⁽⁸⁾」は、「出家」でもなく「在家」でもないことに喩える。こここの二つの「欲云」は、伝えたいことを表している。

(三) 言語行為の動作を表す「曰」と「云」

この場合で使う「曰」と「云」は「言う」、「申す」のように、単に言語行為の動作を表す表現である。この場面の「曰」は 1 例がある。

【例 66】使還曰王。〔上 22ウ・義士遇赦第六十五〕

この例は「曰」の 1 例である。使者が還って王に申した、という意味の例である。こここの「曰」は「マウス」と訓読される。「云」の例は以下の通りである。

【例 67】時外道欲謙身子相云君子女也。云了返。〔中 26オ・提

河長者獲自然太子第廿六〕

例 67 の「云了返」は「言い終えて帰る」という意味であるため、こここの「云」は言語行為の動作を表すものと考えられる。

【例 68】時彼山住一虎。漸聞此事到狐所責云。即狐係天地神誓云。〔下 26オ・狐仮虎威第卅三〕

【例 69】(中略)時狐云若欲知此事先我引上。其後可云。〔下 26オ・狐仮虎威第卅三〕

例 68 と例 69 は下巻の狐仮虎威第卅三にある話である。昔、三地徳という名の狐があり、虎の威勢を仮りて威張る。例 67 では、虎は狐の噂を伝え聞いて、狐の所に行つて責め立てた。そこで狐は天地の神明に(そのようなことはしていないと)誓いを立てた。こここの「責云」と「誓云」はそれぞれ、「責める」と「誓う」の動作を表している。「云」は「責」と「誓」と合わせて言語行為の動作を表している。例 68 においては、狐は仙人の形に化した文殊菩薩と帝釈天の問いに対し、「もしこのことを知りたいのなら、まず私を引き上げる。その後で言うから」と答えた。傍線部の「云」は、言語行為動作の「いう」を表している。

【例 70】此四獸各相語云世間之苦何者為重。各答云。烏云吾飢渴苦為第一。鵠云吾姪欲苦為第一。毒蛇云吾嘔患苦為第一。

鹿云吾驚怖苦為第一。〔下22ウ・五通比丘聞禽獸辛苦第廿七〕

例70においては、四つの獸は世間の一番の苦に関して語っている。前例の「責云」、「誓云」の用法と同様に、この傍線部の「答云」は一つの言葉として「(各々) 答えて言った」という動詞的な意味と思われる。

【例71】時外道欲謙身子相云君子女也。云了返。〔中26オ・提河長者獲自然太子第廿六〕

ここの「云了返」は「言い終わって返った」と意味するため、「云」は単独で言う動作を表していると考えられる。

(四) 「云何」

『注好選』においては、「云何」という用法が見られる。

「云何」は「いかに」という用法である。『注好選』には以下の1例が存する。

【例72】長者問云此子男女云何。身子答云男也。〔中・提河長者獲自然太子第廿六〕

この例では、長者は問ひて、「此の子は男か女か」と言っている。

(五) 「云々」

『注好選』における「云々」は「しかじか」という意味であり、文末に置き、下文を省略するしとして用いる。

「云々」はすべて13例ある。以下のものが挙げられる。

【例73】惟只竭力是有何益者粗注之讓小童云々。〔上1ウ・劫焼第一〕

【例74】善知識奉跡皆備三十二相。楛疵悉得八十種好耶云々。〔中6オ・調達苦大王第三〕

【例75】即此子化祖入仏道也云々。〔中27オ・提河長者獲自然太子第廿六〕

三、まとめ

以上は『注好選』における「曰」と「云」の用例の意味用法と文の構成から分類・帰納したものである。意味用法上、『注好選』における「曰」と「云」は両方とも指称する場合、人の言う言葉・引用の語句の内容を表す場合、また、言語行為の動作を表す場合で用いられる。全体からみると、『注好選』における「曰」と「云」は意味的にはつきりと使い分けられていないことが分かった。両者の差は、「云」の用例数が多く、より多様な使用法が現れていると言える。例えば、

「云何」と「云々」は「云」の特別用法であり、また、人の言うことを示す場合、「曰」はすべて話者の発話を表す働きであり、「云」は発話を表す以外の人の言うことも表せる(二)(三)。

文の構成上、「云」はより多様である。「曰」の用例で現れた文の形はすべて「云」の用例に含まれており、「曰」には使われていない形の文も「云」には見られる。(一)・(二)・**④⑤⑥**、(二)・(一)・2・**④⑤⑥**)。全体から見ると、意味上、文の構成上、「曰」と「云」ははっきりと使い分けられていないが、「云」を多用する傾向性が現れている。

『注好選』をその出典との関係性からみると、「曰」と「云」の使用はすべてが出典そのままの用字ではなく、独自の使用方法に従っていることがわかった。『注好選』の一出典となる『孝子伝』と比べて、「曰」と「云」の使用を以下の表一に纏める。

×	問	白	云	曰	云	曰	『孝子伝』	『注好選』	用例数
云	云	曰	曰	云	云	曰			
3例	1例	1例	3例	7例	25例	20例			

表一

表一は『注好選』を船橋家本『孝子伝』の出典となる部分と比較し、「曰」と「云」の使用状況を纏めたものである。その中、同じ「曰」を使う用例は20例、同じように「云」を使う用例は25例、出典は「曰」であり、『注好選』は「云」を使う例は7例、出典の「云」を『注好選』では「曰」を使う用例は3例、出典の「白」が「曰」に変わったのは1例、そして、出典には「曰」と「云」のような言葉が現れてないが、『注好選』には「云」を使った用例は3例がある。

「曰」が「云」に変わった用例数がより多く、また、『孝子伝』には言語行為動詞の現れていない部分であるが、『注好選』は全て「云」を使っていることから、「云」を使う傾向性が『注好選』にはあると認められる。

このように、今回の調査では、『注好選』における「曰」と「云」は意味的・文法的はっきりとした使い分けが現れなかった。用例数の差、または出典と異なる用字、用例の構造上の多様性からみると、『注好選』においては「曰」より「云」を使う傾向性が現れていると考えられる⁹⁾。

これからは、同じ時代の『注好選』以外の日本漢文と中国古典語文における「曰」と「云」の使用状況を調べ、「曰」と「云」の使用には日中の差があるか、また、日本漢文資料内部には差があるかを検討するのは今後の課題としたい。

〔参考文献〕

- ◎ 東寺貴重資料刊行会編『東寺貴重資料刊行会編 注好選 古代説話集』東京美術 1983. 10
 - ◎ 源為憲著『新日本古典文学大系 二宝絵・注好選』岩波書店 1997
 - ◎ 幼学の会編『孝子伝注解』汲古書院 2003
 - ◎ 水沢利忠「日」と「云」『漢文学論集』鎌田正博士八十寿記念 大修館書店 1991
 - ◎ 『凶書寮本類聚名義抄』本文影印 解説索引 勉誠出版 2005
 - ◎ 鎌田正 米山寅太郎編『大漢和辞典』大修館書店 1990
 - ◎ 王力『同源字典』商務印書館 1982
 - ◎ 王力主編『王力古漢語字典』中華書局 2000
 - ◎ 王鳳陽『古辭辨』吉林文史出版社 1993
 - ◎ 楊伯峻『古漢語虛詞』中華書局 1981
 - ◎ 東辻保和編『打聞集の研究と総索引』清文堂出版 1981
 - ◎ 山内洋一郎編著『佛教説話集の研究』金澤文庫本 汲古書院 1997
 - ◎ 中央大学国語研究会編『三宝絵詞自立語索引』笠間書院 1985
 - ◎ 小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院 1975
- 〔注〕
- (1) 王力『同源字典』（商務印書館 一九八二年）四五六頁にある「hiuat 日：hiuan 云（月文旁對轉）」の部分を参照。「同源字」について、三頁には、「凡音義皆近，音近義同，或義近音同的字，叫做同源字。（凡そ音と義は共に近いか、音は近く義は同じであるか、或いは義は近く音が同じような字は、同源字という。）」とある。
 - (2) 観智院本『類聚名義抄』を参照。
 - (3) 『注好選』三巻。説話。編者未詳。宮内庁書陵部本は「注好選集」とす

るが、「集」は後人の恣意的付加。平安末期成立。『今昔物語集』の一出典とみられることから、十二世紀初めに成立していたと推定される。序および内容から推すに、本来は童蒙教訓、特に寺家の子弟教育用に編集されたもので、編者も学僧または仏門帰依の儒者であろう。（『日本古典文学大辞典（簡約版）』岩波書店 一九八六）

(4) 固有名詞「羅云」（2例）を研究対象と用例の計数から外している。

(5) □□の部分は虫損で読み取れない。

(6) 中国語で、名詞の前に付き、動詞との関係を示す前置詞。

(7) 新日本文学大系『三宝絵・注好選』（岩波書店）「脩」について、「よみ（ししびしほ）は底本の付訓による。古辞書では「ほしし」の訓を当てるが、「ししびしほ」と「ほしし」はいずれも肉の加工品で類義なので、かく読んだであろう。ししびしおは肉の細片を塩・麴・香辛料などの調味料で漬け込んだ食品。なお、ほししは乾し肉。」とある。

(8) 新日本文学大系『三宝絵・注好選』（岩波書店）「在家」について、「在家は出家の対で、本来は在俗の信者（優婆塞・優婆夷）の称。hiatは得度しないで、世俗的生活を営む僧。俗聖（じやくせい）。」

(9) 12・14世紀の片仮名交じり文説話集4点を調べた。資料中に於ける「日」と「云」（いふ・いはくの意で使うもの）の用例数は左の表に纏めている。いずれの資料も、「云」の使用が圧倒的に多い。

日	1例	金沢文庫本仏教説話集	観智院本三宝絵詞	打聞集	法華百座聞書抄
云	54例		398例	120例	6例
				×	×

〔付記〕

本稿は、平成二十六年度（平成二十九年）科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号26370539「訓点語彙の意味論的研究―文脈付き訓点語彙コーパスの作成―」（代表者・松本光隆）による成果の一部である。